

ねこのきもち

CAT'S HEART

2008 JUN.

6

Vol.37



ひとと愛猫との生活総合誌

「ねこのきもち」読者のためのコミュニティサイト
「ねこのきもちeNetメンバーズ」
<http://nekonokimochi.benesse.ne.jp/>

梅雨どき猫グッズの
抗菌・防カビに
こんな
ぷちワザ



日々の暮らしの
たったコレだけで!?
猫はもっと
アナタを
好きになる!

読者体験には
早期発見の
ヒントが
いっぱい!

なんか変!?! で 病気に気付きました

Benesse®

公園で生活する
猫を対象に
地域猫活動に取り組み
ボランティア活動



(上)13年前、中央区の公園で暮らしていた猫たちの食事の様子。
(左上) その公園で代表的な存在だったミケばーちゃん。(左下)
「公園のネコたち」のキャラクター「幸せの青いネコ」の募金箱

猫のために「何」ができるのだろうか

第19回 東京都中央区の公園で 地域猫活動に取り組み ボランティア団体

地域住民やボランティアなどが協力して、
飼い主のいないノラ猫の管理・飼育を
行う地域猫活動。東京都中央区の
公園を中心に地域猫活動を行う
ボランティア団体「公園のネコたち」の
活動をレポートします。

撮影/後藤さくら イラスト/加藤恵理子

「公園のネコたち」スタッフのみなさん



「公園のネコたち」代表の
細野悦子さん（最後列）は、
愛玩動物飼養管理士1級の
資格をもつ。中央区動物と
の共生推進員、東京都動物
愛護推進員。そのほか、お
もなスタッフの方々。現在
は30名ほど。

「春に生まれた子猫は育つけど、
冬に生まれた子猫は育たない。
この話を散歩中に出会ったおじ
さんから聞いて「同じ命なのに
どうして?」と納得できなかつ
たのです」と話すのは、東京都
中央区の公園を中心に地域猫活
動を行う、「公園のネコたち」
代表の細野悦子さん。



中央区の別の公園で暮らしていたマイ
ケルくん。現在は、「公園のネコたち」
の保護施設で療養中です

「動物の命はみな同じ」
という思いが出発点
「春に生まれた子猫は育つけど、
冬に生まれた子猫は育たない。
この話を散歩中に出会ったおじ
さんから聞いて「同じ命なのに
どうして?」と納得できなかつ
たのです」と話すのは、東京都
中央区の公園を中心に地域猫活
動を行う、「公園のネコたち」
代表の細野悦子さん。
このひと言を耳にした13年前
の平成7年から、細野さんはと
くに猫の存在が気になり出した
と言います。そして自宅近くの
公園でお腹を空かせたノラ猫を
目にし、見るに見兼ねて食事を
あげるように。しかし食事をあ

げていると、猫嫌いな人から「ウ
ンチが困るのよね」と、また別
の人から「かわいいけど、ノラ
猫が増えるのは……」と言われ
たそう。
「最初はノラ猫がかわいそつと
いう気持ちで食事をあげていま
したが、でもそれでは無責任だ



ということに気付いたのです」。

細野さんは、すぐ東京都新宿区を拠点に地域猫問題に取り組み「NPO法人ねこだすけ」を訪ね、給餌方法や去勢・避妊手術をするための捕まえ方など、地域猫活動のノウハウを教わります。そうして、細野さんは友人たちと本格的に地域猫活動をスタートさせたのです。

その後、自宅近くの公園でコツコツと活動に取り組む中、猫を通じて友人以外にも仲間が少しずつ増え、平成10年には他の公園でも同時進行で地域猫活動

劣悪な環境に残された 何の罪もない猫たち。 命を救おうと、 新しい飼い主探しに奔走

を行うまでに。

人間の都合で行き場を 失った猫たちを保護

動物プロダクションの倒産で、80匹近くの猫が行き場を失い、保健所で処分されてしまう。平成15年、細野さんのもとに、そんな信じられない事件の情報が届きました。急いで現場に向かうと、多くの猫たちが狭いスペースに押し込められた、悲惨な光景が目に見え込んできたそうです。

「匹数の多さと劣悪な飼育環境に安然としましたね。中には治療もろくにしてもらえず、骨と皮だけの状態で命を落とした猫もいて……」と細野さんは悲痛な面持ちで当時を振り返ります。細野さんたちは、まず病気で緊急を要する猫から保護してい



(上)なでられて気持ちよさそうなしょうへいくん。(左下)トイレの掃除を行う、スタッフの村島さん。(右下)保護施設に寄付された猫タワーでくつろぐヘレンちゃん



寄付をしてくれた方に差し上げたり、フリーマーケットで資金集めのために販売するグッズ。バツジやマグネット、ぬいぐるみ、ピースキーホルダーなどは、すべてスタッフやボランティアの手作りです

きました。飼い主募集を行うホームページを立ち上げ、これを機に団体名を「公園のネコ」に。このホームページが功を奏し、ほとんどの猫が新しい飼い主さんのもとへ引き取られていきました。

猫に新しい飼い主さんを選んでもらいたい

以来、細野さんたちは、新しい飼い主探しをホームページのみで行っています。一般的には譲渡会などを開く方法もありますが、猫のストレスを考えると、猫をあまり外に連れて行きたくない気持ちがあるからだとか。譲渡の流れは、飼い主希望者に保護施設に足を運んでもらい、その人と話をしながら猫を決め、後日相手のお宅まで届けるといふもの。希望者がどんなに気に

協力獣医師のもと、 猫たちの 去勢・避妊手術や 健康管理を行う

公園や保護施設で暮らす猫の去勢・避妊手術やワクチン接種、病気の治療は、寄付金や募金を資金に「公園のネコたち」の活動に賛同した協力獣医師が行っています。動物病院に行っていない猫は、協力獣医師が公園に往診することも。

また、前々から飼い主のいない猫のための動物病院があればと考えていたという細野さん。平成16年、以前働いていた動物病院で知り合った松田あゆみ先生を院長として、飼い主のいない猫のための動物病院開業を見事実現させたのです。

(右)飼い主のいない猫のための動物病院で、治療を施す松田先生。(左上)スタッフが記録している病気日誌。(左下)公園への往診も行っていただいていた二郷友三郎先生。現在はおもに保護施設の猫を診察



猫のために何ができるのだろうか



(上)区の公園課の許可を得て、雨風をしのぐための猫ハウスが設置されています。(左下)ひなたぼっこをして、くつろぐウシくん。(右下)食後、ブラッシングを受けるボス猫のカンちゃん



(左上)ボランティアの人々が美猫と評するオセロちゃん。(右上)膝にのるほど人懐っこいフクちゃん。(下)中央区のある公園で、地域猫活動を行うボランティアのみなさん

活動を始めた当初、細野さんたちは自宅で病気の猫や子猫などを保護していました。しかし数が増えたため、平成12年には動物病院の一角を借り、平成18年には現在の保護施設を開設するに至りました。

そこでは新しい飼い主さんを探す猫、病気や障害などにより公園で暮らせなくなった猫など、28匹ほどの猫が暮らしています。「保護される猫たちは、さまざま過去を背負っています。どんなに人間に不信感を抱いている猫でも、無理強いすることなく、あきらめずに気長に接していくけば、少しずつ心を開いてくれる。そんな猫に新しい飼い主さんが決まったときがうれいんですね」と細野さん。

自宅、動物病院を経て専用の保護施設を開設

地域住民の理解を得て東京都の支援地域に申請

平成15年、細野さんのところへ、中央区の別の公園で猫の世話をする女性がやって来ましたがその女性は1人では上手くいかないと悩んで、「細野さんたちが活動している公園の猫たちは幸せに暮らしている」という噂を聞いて見に来たそうです。

「地域住民の理解や東京都の認定によって、前よりも活動がしやすくなりましたね」と話すのは、約4年前から細野さんの活動に加わった、近隣の会社に勤める染谷さん。現在、細野さんはたまにアドバイスするくらいで、地域住民や在勤者など約35名のボランティアが中心となって活動を行っているそうです。

それが縁で女性が世話する公園でも、地域猫活動をスタートすることに。その公園で細野さんは、地域住民、中央区保健所、ボランティアの三者で話し合う場をもつことにしました。とくに周辺から大きな苦情はなかったものの、地域住民に公園にいる猫への理解を得ることで、より活動がしやすくなると考えたのです。実際に聞いてみると、「じつは町内会は、通りすがりの人などの猫に食事をあげるマナーの悪さに困っていたようで。掃除などちゃんと管理を行うと話す」と、納得してくれました。

また、その活動を続ける中、平成18年には、東京都が地域猫活動を行う地域を支援する「飼い主のいない猫との共生支援事業」の支援地域に申請し、認定されたのです。

また、その活動を続ける中、平成18年には、東京都が地域猫活動を行う地域を支援する「飼い主のいない猫との共生支援事業」の支援地域に申請し、認定されたのです。

地域住民、保健所、ボランティアの話し合いで公園にいる猫への理解を得た



(上)地域の再開発で行き場を失ったところを保護されたうちゃん、ひかりちゃん、きらちゃん。(左下)細野さんに抱きかえられるさつきちゃん。(右下)活動当初、寄付をしてくれた方に御礼として差し上げた写真集と、細野さんたちが世話をした猫の話が取り上げられた本

子供たちに命の大切さを伝える取り組みも

地域猫活動を通して、捨て猫が絶えない現実と直面した細野さんは、平成19年から、子供たちに命の大切さを伝える取り組みにも力を入れています。まずは親子でのアイロンビーズのマグネット作り。そのマグネットの売上金が猫たちの命を救うことにつながるかと伝えて、命を大切にすることを育み、自分に何ができるのかを考えるきっかけになればと期待しています。

今年には、小学校で細野さんが猫の着ぐるみを着て、小学1〜2年生に外にいる猫たちの話

猫を通じて生まれた人の輪

をずる機会も。細野さんは、一動物を飼うからには、動物の命に最期まで責任をもつて欲しいですね。将来、大人になる子供たちに命の大切さを伝えることで、小さな命をも大事にする社会になっていけばと思います。

公園で猫を通して知り合った人、保護施設から猫を引き取ってくれた人などが、その後も自分のできる形で細野さんに協力することも少なくありません。現在、10〜20名ほどのボランティアがいるそう。細野さんは「個人でできることには限界が

外で暮らす猫たちに手助けをする人々をサポートしたい。それが今後の目標です

あります。ここまでできることができたのは、猫を通して知り合った人たちに支えられたおかげ。現在は公園だけでなく、市場や商店街など活動範囲が広がり、団体名も「たち」を加え「公園のネコたち」に。公園にいる猫たちはのびのびと暮らしているように見えますが、交通事故や感染症など外での生活は過酷です、と話す細野さん。自分が多くの人に支えられたように、今後は外で暮らす猫たちに手を差し伸べてくれる人たちのサポートにも力を注ぎたい。そんな思いを胸に、今日も細野さんは公園で待つ猫たちのもとへ向かっています。

猫のために何ができるのだろうか



(左)小学校で着ぐるみで講演を行う細野さん。(中)中学1年生という最年少ボランティアスタッフの竹田衣里ちゃんと、(右)柴田さん、吉平さんは、トイレ掃除や食事の世話などを手伝います

問い合わせ先

「公園のネコたち」の活動内容については、下記のウェブサイトに掲載されています。

「公園のネコたち」

http://blog.livedoor.jp/kouenno_neko/